

佐伯 祐三(さえき ゆうぞう)

明治31年 - 昭和3年(1898 - 1928)

明治31年(1898)	大阪市に生まれる
大正6年(1917)	上京、川端画学校洋画部に入学
大正7年(1918)	東京美術学校西洋画科予備科入学
大正12年(1923)	東京美術学校卒業、年末に渡仏
大正13年(1924)	パリ郊外のクラマールに住み、アカデミー・グランド・ショミエールに通う。また、里見勝蔵とヴラマンクを訪ねる。その後モンマルトル駅近くに転居、パリの街景を描く
大正14年(1925)	サロン・ドートンヌに「コルドヌリ(靴屋)」他が入選
大正15年(1926)	帰国、里見勝蔵ら5人で「一九三〇年協会」を結成、また、第13回二科展に滞欧作を発表し二科賞受賞
昭和2年(1927)	再渡仏。サロン・ドートンヌに「新聞屋」「広告のある家」が入選
昭和3年(1928)	パリ郊外の病院で客死

「コルドヌリ(靴屋)」 大正14年頃(c.1925) / 油彩・麻布 / 54×47cm



作品紹介

この作品は佐伯がモンパルナスのシャトー街に住んでいた時に描かれたものです。アトリエのあった建物の入り口のすぐ横に靴屋があり、同様のモチーフで何点か作品を描いています。1925

年のサロン・ドートンヌに入選した作品も「靴屋」という題名でしたが、この出品作は展覧会初日にドイツの絵具会社に売れた後、所在がわからなくなっています。パリ滞在中の佐伯は、この絵に見られるように文字が書かれた白壁や、正面から描かれた商店の入り口、また店の奥で靴職人が仕事をしている光景など、パリの裏町にある建物や庶民の生活が息づいている街角の風景を好んで描きました。

よく知られているエピソードですが、この作品を描く前年の夏、佐伯は友人の画家里見勝蔵とともにヴラマンクのアトリエを訪ね、持参した作品を見せたところ「このアカデミック！」と一喝されてしまいます。尊敬していた画家のこの一言で、彼は、これまで影響を受けてきたセザンヌやゴッホ、ユトリロ、そしてヴラマンクらの物まねではない自分の絵画を描かねばならないことを心底理解したのです。

パリの街は石の壁で出来ています。古い歴史を刻んできたその壁に、おおいなる魅力を感じたのでしょうか、佐伯は、石の壁とそこに貼られた看板やポスターの文字などを憑かれたように描き始めます。その後一時帰国をするものの、日本の風景は彼の創作意欲を満足させることができなかつたので、すぐにフランスに戻り、再びパリの街並みに立ち向いましたが、わずか30歳でパリで客死してしまいました。